景観まちづくり学習助成事業実施校　　学校名　横須賀市立望洋小学校

① 学習指導案

プログラム	No.03「よくよく見れば、あの場所に」
単元名 （全70時間）	桜が丘の良さを自覚しよう
学習のねらい	・周囲の自然や町の様子について観察し、その特長が分かる。 ・感じたことや伝えたいことをまとめ、表現する。 ・地域の課題や特長を知り、よりよい地域になるように取り組もうとする。
学習内容	写真を媒体として桜が丘の風景を今一度見直していく。そこで、普段何気なく遊んでいるものや通っている道にたくさんの魅力があることに気づき、自分たちの住んでいる町の良さを自覚できるようにしていく。 また、探究サイクルを回していく中で、課題の見出し方、情報の集め方や整理の仕方、まとめ方など学びに向かう力も培っていく。
参考資料 準備品 実施場所等	参考：横須賀写真ライブラリ、大津観光協会写真コンクール　等 準備品：児童が使用するカメラ、chromebook、写真出展用品　等 実施場所等：桜が丘の歩道や公園、横須賀市文化会館ギャラリー　等

学習の流れ

時間	学習活動	教師の指導	評価
10	1．横須賀の魅力を伝え合おう	社会科の学習と関連付けられるように進めていく。	横須賀市の自然や町の様子について観察し、その特徴に気づいている。【知】（記述、発言）
10	2．桜が丘の魅力を自覚しよう	現地調査を繰り返し、学習資源と直接出会うことができるようにする。	望洋小の周囲の自然や町の様子について観察し、その特徴に気づいている。【知】（記述、発言）
15	3．桜が丘の魅力を発信しよう	一方的な発信ではなく、相手意識や必然性、振り返りを大切にしていく。	望洋小の特長を維持したり伸ばしたりできるよう、友だちと協力して取り組もうとしている。【主】（発言、行動）
15	4．もっと魅力を伝えるために、できることを考えよう	学びの結果から新たな課題設定がなされるように進めていく。	地域の課題や特長を知り、よりよい地域になるよう、その一員として自覚をもって取り組もうとしている。【主】（発言）
15	5．写真展開催に向け	写真展の動画や見本を用	写真展を開催するために必要な準備を

	て準備をしよう	意し、その中で子ども達が必要な準備を見つけられるようにしていく。	考えている。【思】（記述・発言）
5	6．写真展を振り返ろう	一律一斉の形式で行うのではなく、子ども達の中から溢れてきた思いを自由に表現できるようにしていく。	活動した内容や成果について、様々な方法でまとめ、表現している。【思】（記述）

＜留意点＞

・感染症拡大防止対策の範囲の中で地域の人的・物的資源を活用していく。

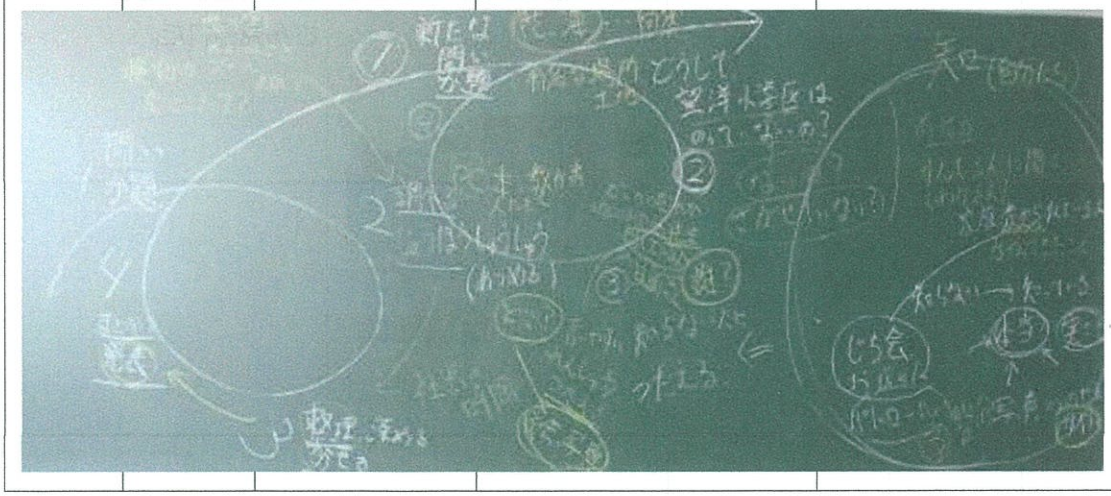
・子ども達の思考や取り組み方により即興的に授業を展開していく。

② 事業実施報告書詳細

学校名　横須賀市立望洋小学校

時間数	場所	概要	活動記録（写真）	対象者の反応
10	教室 パソコン室 図書館	横須賀の魅力を伝え合おう ①横須賀市の魅力的な場所を考えたり調べたりしよう。	 横須賀市の魅力的な場所について知っていることを伝え合っている。 横須賀市内の魅力的な場所を調べている。	児童の目線で自由に思考を進めていた。「自分たちが楽しめる場所」を中心に、生活経験から横須賀市の魅力的な場所を語り合い、友だちの言葉から「ああ、たしかに」と考えを広げる姿がたくさん見られた。

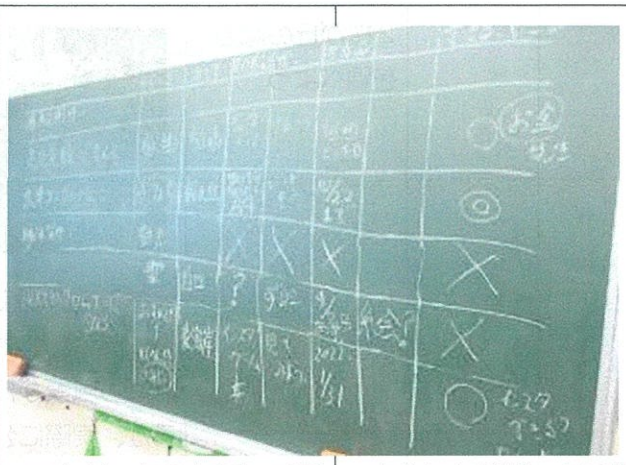
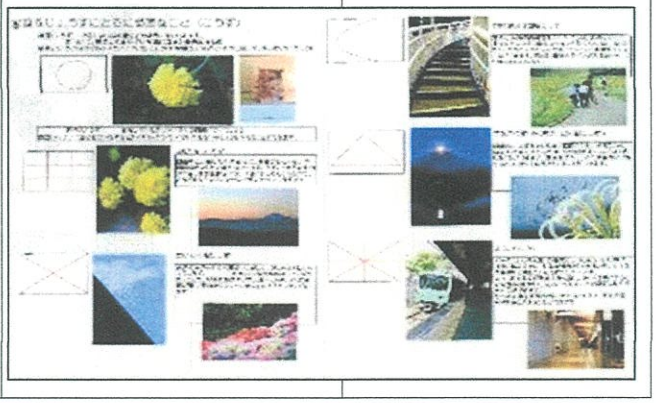
		②横須賀市の魅力的な場所を伝え合おう。	 横須賀市内の魅力的な場所を伝え合っている。	花、海、川に着目する児童がほとんどであったことから「自然」に心地よさを感じていることがうかがえた。
		③伝え合った結果を振り返ろう。		伝え合った後に一人が「あれ、桜が丘のことは出てこなかったな」とつぶやくと「確かに」という声が多く上がり「私たちの地域って魅力的な場所はないのかな」という疑問の声も上がった。
10	教室 パソコン室 校内ビオトープ 中央公園	桜が丘の魅力を自覚しよう ①桜が丘の魅力的な場所を考えよう。		自然を「魅力」と考えたときに、日頃遊んでいる公園内にも自然がありそこに魅力があるかもしれないという気づきが生まれた。

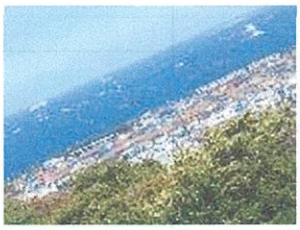


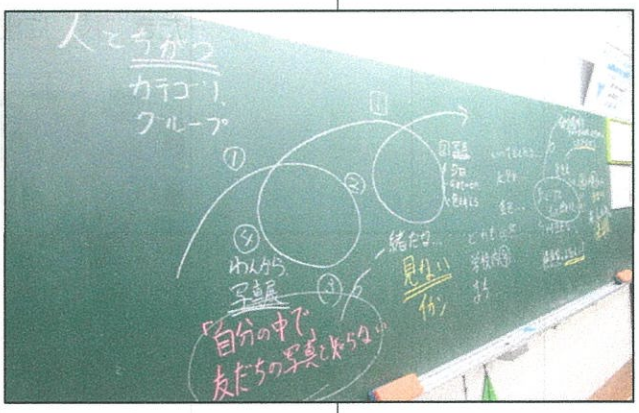
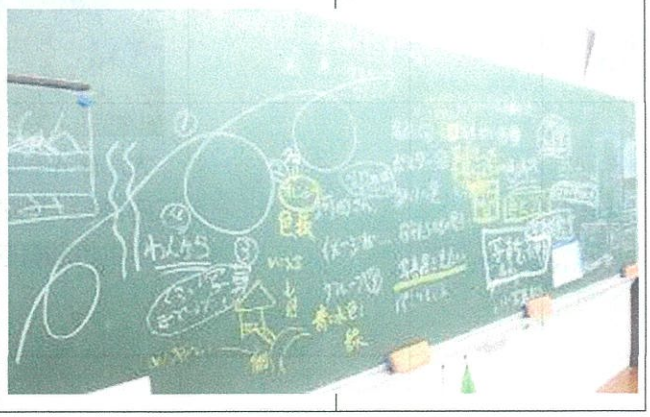
		②桜が丘の魅力を調べよう。	 横須賀市の良さを調べる際に感じた「素晴らしい」と思う風景が桜が丘にもあるか、実際に公園へ行って調べている。 「素晴らしい」と感じた身近な環境を撮影している。	「自然」という見る視点を持った状態で公園へ行くと、普段何気なく目にしていた風景も、よく見てみると素晴らしさが隠されていることに気づいていた。 また、「4月にこの公園で遊んだときとは違った風景だ」というつぶやきから「季節ごとに公園の色合いが違う」という気づきも生まれ、今後の変化に対する期待も膨らませていた。

児童が撮影した写真

			 撮影した写真を見比べている。	自分たちが撮影した写真と横須賀写真ライブラリに掲載されている写真とを見比べ、「撮り方が上達するともっと魅力を伝えられそう」という声があがった。

		②桜が丘を魅力的な町として発信するための方法を考えよう。	 マトリックスを用いて可視化をしながら実現可能かどうかを考えている。	自分たちが撮った写真をどのように発信していくのかを考え「写真展」や「コンテスト」といったキーワードが上げられた。
15	教室 パソコン室	桜が丘の魅力を発信しよう ①撮影技術を高めよう。 ②プロの“技”を知ろう。	 自分たちが撮った写真の良さを自分たちなりに探し、ワールドカフェ方式で共有し合っている。 	「お手本と見比べる」という書写での学び方を生かし「写真家の方の撮った写真と比べたい」という意見が上がった。また、体育での「人に見てもらうと視点が広がる」という学び方を生かし「自分たちの写真を写真家の方に見てもい、評価をしてほしい」という考えも上がった。

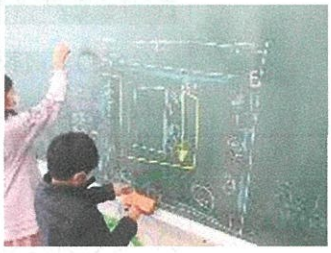
			「写楽よこすか」の河田さんにいただいた写真の撮り方レシピ。	図工「お話の絵」の構図とも関連づけて考えることで手の届かない方法ではなく「自分たちにもできそう」という思いが芽生えた。
		③プロの“技”を使ってみよう。	「写楽よこすか」の方々とコンタクトを取り、写真撮影のコツ（レシピ）をいただき“技”に出合う。 プロの“技”の一つである「ローアングル」に挑戦している。	これまでの撮影の様子とは明らかに児童の撮影姿勢が変わった。 校外に出ることで公園で活動する地域の方や桜が丘のお店の方とも関わることができた。そうした中で自分たちの地域に住む人々の暖かさにも気づくことができていた。
		④写真で魅力を伝えよう。	 大津観光写真コンクールに応募し、児童１名の写真が学生特別賞を受賞する。	これまで取り貯めてきた写真を振り返ることで「前よりも良く撮れるようになってきた」「魅力が伝えられるような写真になってきた」と自分たちの成長を振り返ることができていた。

			 地域のギャラリー&カフェに協力していただき「望洋小学校３年生写真展」を開催する。	
		⑤自分たちの成長を振り返ろう。		自分たちで写真展を開くということは４月当初に「やりたい」とは思いつつも「できない」と思っていた。しかし、見通しを持って活動を進めていくことで自分たちにも実現することができたという達成感を得ることができていた。
15	教室 ビオトープ 屋上 桜が丘１丁目 桜が丘２丁目	もっと魅力を伝えるために、できることを考えよう ①自分たちの姿から課題をみつけよう。		

			 自分たちが出展した写真を客観的に見て改善点を見つけている。	「全体的に青空や葉っぱが多い」「黄色や赤が少ない」「どれも同じに見える」という気づきから「やっぱり夕日を撮りたい」「秋は赤や黄色の葉をよく見かけるからもう一度写真を撮りに行きたい」という思いが子ども達の中からあふれ出てきていた。また、背景の色も写真を際立たせるために大切であることにも気づくことができた。
		②展示の仕方や写真に合った背景をみつけよう。	 自分たちで写真を撮影し、写真にあった背景の色を選んで額に飾っている。	自分たちが思い思いの写真を展示した結果、学年全体としてまとまりのない展示となってしまったと振り返っていた。また、写真に合った背景の色を選んだが、実際に飾ってみると黒か白が一番写真の良さが際立つかもしれないという気づきも得ていた。
		③学年全体で見たときに色鮮やかな写真展となるような撮ろう。	 放課後学校の屋上に集まって夕日を撮影している。 児童が撮影した写真。	このようや夕日や富士山を一望できるということが桜が丘の良さであるということを再認識していた。また、夕日だけではなく、海沿いのライトアップを目にしたことで夜景についての興味も高まっていった。

		③校内写真展を開き、課題を解決することができたかを考えよう。	 学年全体でお互いが出展する写真を気にしながら写真選びをしている。 「同じ色合いや構図が隣り合わないように」ということ考えながら自分たちで写真を配置している。 校内作品展で開催した３年生写真展。	前回の写真展は「各々が“自分”の写真だけにこだわっていたため同じような写真ばかりになってしまっていた」という気づきから「写真が重ならないように」ということを意識して取り組んでいた。 写真展を鑑賞しながら気づきや感想をまとめ、よりよいものにするためにはどうしていったら良いのかを、授業時間外に自分たちで話し合い、できるものはその場で修正を加えていた。
		④本物の写真展と比べよう。	 本物の写真展の中を観覧している様子（動画）を見ながら、３年生写真展との違いを探っている。	自分たちの想像に終始するのではなく、実際のものを見ることで、写真展“ごっこ”ではなく、写真展を開くという意識が強まっていた。

15	教室 ビオトープ 屋上 桜が丘1丁目 桜が丘2丁目	写真展開催に向けて準備をしよう ①写真家の方と関わろう。	 ２名の写真家の方が来校されることを知り、２時間の中で４５名がどのように関わっていくことが望ましいのか、見通しを立てている。 写真家の方と関わっている。	“効果的”に関わるための方法を考える中で、関わり方のプランが３つ挙げられた。その３つのどれかに絞るのではなく３つを実現するために子ども達自身が個別最適に学ぶ姿勢を発揮するとともに合意形成を図りながら学習を進めていた。 これまで、インターネットや文献によって情報を得ることが多かった子ども達だが、人と直接かかわることで「必要以上の情報を得られる」「実物を見ながら知ることができる」「知りたいことについて的確にわかる」と、その良さを実感することができていた。
		②写真展に向けて見通しを立てよう。		これまでの学びから「自分一人」で魅力を伝えるのではなく「４５人の写真が集まって」桜が丘

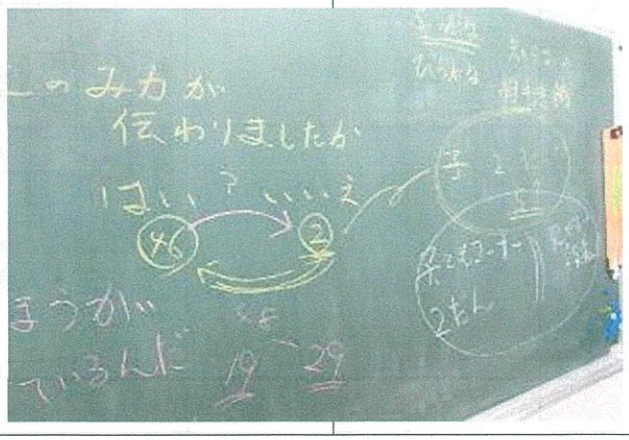
			 Googlemeetを利用して他の学級の児童と意見を出し合いながら見通しについて考えている。	の魅力になるように心がけていた。 感染症拡大防止対策としてペアやグループワーク、他学級と関りながら学習を進めていくことに制限がかかったが、GoogleclassroomやGooglemeetといったコンテンツを利用して協働的な学びを進めていた。
		③写真展を開催するための準備をしよう。	 配色や構図をもとに写真の配置や組み合わせを考えている。 入口に設置する立て看板を作成している。 会場内を落ち着いた雰囲気にするためのBGMを選曲している。	見通しを立てる中であげられたいくつかの役割について、子ども達自身が「自分はこの役割なら責任を持って取り組むことができる」というものを選び、適材適所で準備を進めていた。取り組む中で「あれもやらないと」「これもやっておいた方がいいかも」という声があがると、「じゃあ自分がそっちの準備にうつるよ」「ごめん、こっちはこれでいっぱいいっぱいだから任せるよ」と主体的かつ協働的な学びが子ども達の中からあふれていた。 また、お手本となる写真展の動画を参考に写真展“ごっこ”ではなく、社会一般から見ても写真展として認められるようなものを作り上げるために、思い立ったことへ真っ直ぐ進むだけでまなく

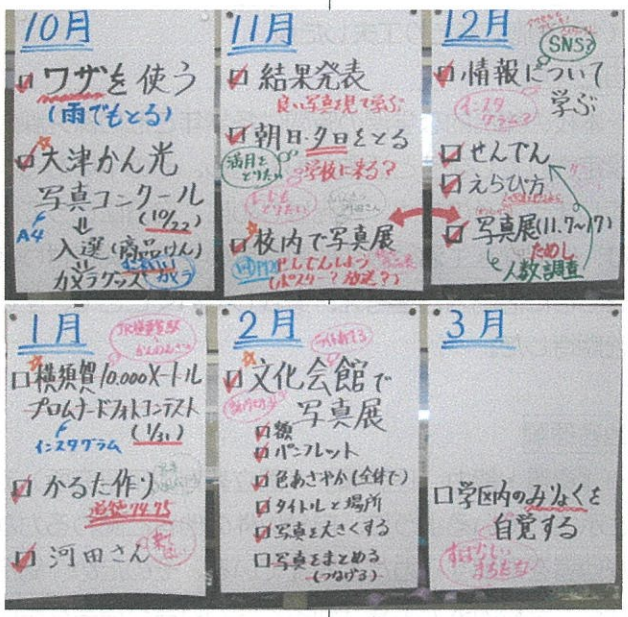
つねにこれまでの学びを振り返ったりお手本に戻ったりしながら取り組んでいた。

2/11～13　横須賀市文化会館ギャラリー２　「望洋小学校３年生写真展」

卒業式・入学式に展示するパネル。
（学校の魅力かるた）

６年生を送る会の出し物（ムービー）や卒業式・入学式掲示用のパネルでも、子ども達

				自身が学びを生かし、桜が丘の魅力を伝えようとしていた。
5	教室	写真展を振り返ろう ①自分たちにとってどのような写真展であったのか振り返ろう。		3日間で延べ169名の来場があったことを知ると、素直に「そんなに来てくれたんだ」という喜びの表情であった。その中で、「来てくれた人から見で、自分たちの写真展はどのようなものだったのかな」という疑問が湧き出てきた。
		②写真展で書いていただいたアンケートを集計し、考察しよう。	 アンケート項目をグループごとに分担して集計している。	「桜が丘の魅力は伝わりましたか？」という項目について「わからなかった」という回答が2つあった。（N=59） その2つについて「どうしてだろう」と考えていくと「この字は小さな子の字だ」「確かに小さな子が楽しめるような写真、例えば公園の遊具とかは少なかった」という考えにたどり着いた。
			 	

		③自分たちの写真から地域の魅力をみつけよう。	 自分たちが撮りだめてきた写真を見返しながら桜が丘の魅力を再認識しようとしている。	「カメラ越しに見てみると、何気ないものが素敵に見える」「中央公園にこんな花があったなんて気づかなかった」とあらためて桜が丘の魅力を見直すことができていた。また、写真を撮り始めた時期が夏頃であったため「春の魅力も探しに行きたい」「２丁目公園の桜がすごいんだよ」と、季節に対する気づきも見られた。
		④学びを整理しよう。	 外国語の学習をもとに児童が立てた「やることリスト」。	見通しを持って取り組むことが学びやすさにつながることを実感していた。また、こうした見通しを自分たちで作り上げる経験から、自分たちの力の高まりにも気づくことができていた。

		⑤新たな課題を見つけよう。	 “春”を探している様子。	これまでの活動によって、学習のねらいである「桜が丘の魅力をあらためて実感しよう」ということについては一人一人が達成感を得ていた。 また、春夏秋冬の桜が丘の姿を知ったことを土台として「来年はこうしたい」「今年の学びをしかしてこんなことをしたい」という思いを口々に出していた。

③　実施内容について

（1）実施にあたり工夫した点

自己理解

本校の総合的な学習の時間は各学年ごとに探究課題が設定されているが、活動だけが先に設定されてしまうと活動が形骸化し、その中にある学びが薄れたり、あるいは失われたりしてしまう。そのため、単元はじめに“自分にとって必要な学び”“自分にとって価値ある学び”は何かを生活経験や他教科等の学習と関連付けながら考えていった。そうした自己理解をもとに活動内容を考え、実践していくことで、子ども達が主語となる総合的な学習の時間を期待した。

他者理解

『資質・能力　理論編』（国立教育政策研究所）でも「多様な他者と関係を築きながら」と示されているように、自分以外の他者と関わる力が必要とされている。そうした力の一つが他者を理解する力だと考えている。そのため、総合的な学習の時間を机上の学習のみではなく、学校内外で多様な他者と関わり合う機会を設け、その中で他者について考えると同時に、他者にとって自分自身がどのような存在であるかも考えられるようにしていった。

主体性

総合的な学習の時間を展開するために教師自身が単元計画（年間計画）を持っていることはごく自然なことであるが、それを「１本道」としないよう心掛けた。子ども達は教師が思いもよらないところに目を輝かせて関心を抱き、教師が「ここを考えてほしい」というところには見向きもしないということもよく見られる。そのときに教師の即興的対応力が問われる。教師が与えてしまった時点で子ども達は受動的にならざるを得ないため、学習中の発問を精査し、子ども達同士が語り合う時間や思考する時間を十分に確保し、子ども達が“自分の学習”と捉えることができるようにした。

協働性

上記の主体性による学びが「孤独な学び」に陥らないようにしなければならない。そのためには、子ども達自身が「一人では解決が難しい課題」「他者と協働した方が解決しやすい課題」に出合い、他者の存在があったから学びが進んだり深まったりしたということを経験していく必要がある。「写真を撮る」という個別の活動に終始するのではなく、「写真展を開催する」という学年全体での目的を設定し、必然的に他者と協働しながら学び進めていくことができるようにした。

将来展望

各教科等とキャリア教育との関連付けが推進されている昨今において、総合的な学習の時間でも未来を創る子ども達が学び育っていかなければならない。今回の学習では最終的に子ども達自身が「自分たちの地域を誇ることができる」という姿を目指した。日々何気なく遊んでいた公園や、ただ通っていただけの通学路に対してじっくりと目を向けることで新たな見方が生まれ、地域への愛着が深まっていった。

社会参画

社会参画の形は様々であり、学校だからできること、子ども達だからできることも数多く存在する。本単元では、子ども達目線での写真展を開催することが子ども達にとっての社会参画の形であった。こうした「自分たちも社会に対して何かできることがある」という経験を積み重ねていくことで、将来的には自分たちが生きていく社会を自分たちで創っていくという意識を持つことを期待した。

（2）実施にあたり苦労した点

今できる学び方

年度内において感染症拡大状況が変化したため、その影響により学び方が二転三転した。教師もその都度学び方を考えることに試行錯誤したが、上記のように子ども達自身が学びを自己調整していくことを中心としたため、その都度可能な学び方を見出すことに子ども達も頭を悩ませていた。

特に１月以降は、年度初めに厳しかった制限が少しずつ緩和され、活動が軌道に乗り、いよいよ集大成に向けてという時期に再び強い制限を強いられ、難しさを感じた。

「子ども達の即興性」に対応するための教師の授業デザイン

上記の（1）実施にあたり工夫した点　主体性　に教師側の即興的対応力の必要性を記したが、その前段階には莫大な下準備が存在した。子ども達が進む方向を何通りも予測し、いくつもの手立てを持った上で子ども達の前に立たなければならない。とくに学校外との関係を築き上げていくためには子ども達がそれらと出会うことを予測し、教師側が事前に関係性を持っていなければならなかった。関係性が「個」と「個」ではなく、「学校」と「地域」としていくことで、こうした状況が改善されると感じている。

（3）児童の反応

探究サイクルの活用

総合的な学習の時間の中心となるのは探究学習であり、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究サイクルを年間通して何周も積み上げていく経験が大切だと考えている。

学習はじめは自分たちで活動を考え、選び、取り組んでいくことに対して不慣れな部分があり、子ども達から「先生、今日の総合は何するの？」という声が授業前に聞こえていた。しかし、取り組みを続けていくことで「先生、今日はこれやらなきゃいけないですよね」「これをやるためにはあと３時間はほしいんですけど、平気ですか」と変化し、自分たちで探究サイクルを回そうとする、あるいは回すことができるようになった。

こうした探究サイクルは他教科等でも多々活用されており、子ども達にとって学び方の流れとして身についている。

子ども達にとっての切実性

子ども達にとっての「学びたい」という思いは、そのまま学びへのエネルギーとなり、そのためには切実性のある学習課題が必要となる。子ども達にとって身近で何気ないこと、無自覚であったことに目を向けることで、自分事として学びが進められていく。

こうした取り組みの中では、子ども達から「〇〇したい」という思いがあふれ、本当にそれを実現したいという思いから、おのずと授業への取り組み方にも熱が入っていった。

年度初に抱いていた切実性は、年間を通して学びを進めていく原点という位置づけとなっており、取り組む中で迷ったときに必ず原点を振り返る姿が見られた。こうした取り組み方により、活動がどれだけ多様なものになっても、最終的なねらいについて子ども達が迷うことはなかった。

（4）担当教諭及び担当外教諭の変化

各教科等横断的な授業デザイン

総合的な学習の時間に学び方を学び、他教科等で同様の学び方を生かす、生かしたことでその学び方がより洗礼され、次の総合的な学習の時間に生かされていく。こうした授業デザインは学習指導要領にも明記されており、カリキュラム・マネジメントを進めていくためには不可欠である。

内容項目でのつながりは見えやすいが、それ以上に資質・能力によるつながりを意識していかなければならず、どのような力を育みたいのか、どのような力を生かすことができるのかを日々考える良い機会となった。

地域の人的・物的資源の活用

学校評価の結果からは８割の教職員が地域の人的・物的資源の活用に関して「積極的に取り組んでいる」という回答が得られている。しかし、過去の取り組みを振り返るとその関わり方が継続的ではないことが明らかとなり、SWOT分析の結果からは「学習材が少ない」「人脈不足」という困り感が強いこともわかった。

今回の総合的な学習の時間は「写真」という媒体を中心とすることで子ども達と地域とがつながりをもつことができた。

今回の学びは地域の人的・物的資源の活用があったからこそのものであり、学校の中で閉鎖的に学習が進められていたら得ることが難しい学びであったと切に感じている。これらを活用した学習は生活科や総合的な学習の時間に組み込まれることが多いが、他教科等でもその活用方法を見出すことによって、子ども達によりよい学びの場や時間を提供することができると感じた。

（5）今後の課題と取り組み〔児童の思考過程と指導内容との関連付けから、留意すべき事項等〕

フリースタイルプロジェクトに向けて

奈須正裕著『個別最適な学びと協働的な学び』によれば、フリースタイルプロジェクトとは「これまで教師が主導することも多かった『学習内容』『学習方法』等をすべて子どもに返す子ども主体の学習」とされている。

小学校においてそうした学び方がなされることは現時点ではイメージしにくいものだが、中学校や高等学校では「個人総合」と称され、フリースタイルプロジェクトと同様の方法で学びが進められている。小学校段階ではその素地となる部分をしっかりと育んでいく必要があると感じている。

総合的な学習の時間は学校として探究課題が各学年に設定されていることがほとんどであるが故、活動内容も「例年通り」となってしまうことが少なくない。そうなってしまえば、これからの社会に求められている力（創造的思考、メタ認知力、問題発見力）の育成がなされず、子ども達にとって有意義な学びの時間とはならない。フリースタイルプロジェクトとまではいかずとも、子ども達が自分自身の学びを自己調整していく力を育んでいく必要があり、それは6年間（中学校も含めると9年間）をかけて築き上げていかなければならない。そのためには一教師が授業力向上を目指すのではなく、学校組織としての授業改善が求められてくる。

学校運営協議会を架け橋とした関わり

今回の取り組みでは、担任が実際に足で得た情報をもとに地域の人的・物的資源とのつながりを広げていったが、前述の（4）担当教諭及び担当外教諭の変化地域の人的・物的資源の活用でも記したように、この方法ではつながりが継続的ではなく、年度がかわると再び一から考えていかなければならなくなってしまう。

そうした課題を解決するための組織が学校運営協議会である。本校でも令和4年度から導入され、学校と地域とが熟議をする機会が設定される。そこで、これまで教師自身が認知してこなかった（できていなかった）地域の人的・物的資源について知ることができれば、これまで以上に地域の人的・物的資源を活用した授業デザインが可能となってくる。

学校運営協議会を架け橋とし、「ともに子ども達を育てていく」という意識を持った地域の力を見出していく必要性を感じている。